

元雜劇テキストの明代以降における繼承について

土屋 育子

一、はじめに

元雜劇¹⁾は、中國古典演劇史において、具體的な姿をうかがうことの出来る最も早い劇種である。というのも、元雜劇の現存する最も早いテキストである「元刊古今雜劇三十種」(以下、元刊本と略稱)は、中國古典演劇の現存する最も早いテキストでもあるからである。ただ残念なことに、この元刊本は主に曲辭を収録し、臺詞やト書は部分的にししか載せていないため、解釋にはしばしば困難が伴う。元刊本の用途については、「觀劇に便するための冊子」²⁾であったという説もあるが、はっきりしたことは不明である。元代における雜劇のあり方に關しては多少議論の分かれるところであるが、元代にはおそらく祭祀・商業いづれの場合においても上演され、廣く民間で行われていたことは確かであろう。明代に入ってからでも雜劇は作られ続けているが、上演はもっぱら宮廷内や王府においてのみ行われるようになっており、元代とは状況が變化している點は注意すべきであろう。現存する雜劇テキストのうち最も大部なものである脈望館抄本は、その多くが宮廷と何らかの關係を持つと考えられ、また當時の記録からは雜劇テキスト

が宮廷に多く集められていたと言われている³⁾。

明代の宮廷内では主に雜劇が上演されていたのであるが、宮廷外の實演の場ではどのような演劇が行われていたのか。それは、南曲と呼ばれる、雜劇とは異なる劇種であった。南曲が雜劇と異なるのは、主に音樂面と形態面においてである。兩者の違いを挙げると次のようになる。

雜劇は、北方の音樂である北曲を用い、一つの宮調(西洋音樂における調性に類似したもの)⁴⁾からなる組曲、すなわち套數を四つ連ねることにより構成されている。また、中國の傳統演劇では歌唱を伴うのが一般的であるが、雜劇の場合には、唱い手が主役に扮する一人の役者に限られる點が特徴である。一方の南曲は、南方の音樂が使われ、二十から五十の部分からなる長篇であり、登場する役者の誰もが唱うことが出来る。

このように雜劇と南曲は異なる劇種ではあるが、演目の中には同じ題材を扱ったものがみられる。それでは、雜劇と南曲というこの兩者の關係は一體如何なるものなのか。

南曲のテキストを仔細に検討すると、雜劇が南曲に取り込まれる現

象が起きている。しかし、従来の研究では、雜劇テキスト間の繼承關係、また南曲相互間の比較について考察されるにとどまり、雜劇が南曲へどのように繼承されているのかという問題については、ほとんど明らかにされていない。この問題は中國古典演劇史において、重要な意味を持つてはいるはずである。

本稿では雜劇と南曲の關係を明らかにし、明代以降、雜劇がどのように繼承されたかを考察することを主な目的としたい。サンプルとしては、元刊本が残っており、かつ、南曲のテキストも存在するものがふさわしい。そこで、以上の條件を満たす、「追韓信」・「東窗事犯」・「單刀會」の三種を取り上げることにする。各々は南曲テキストへどのように繼承されているだろうか。

二、テキスト

主に使用するテキストの一覽を次に掲げる(各テキストの末尾は本稿で使用する略稱)。

I 雜劇テキスト

- ①『元刊古今雜劇三十種』(元刊本)……もとはそれぞれ別々に刊行されたテキストであるが、現在ではまとめてこのように總稱する。元代に刊行された雜劇テキストとしては現存する唯一のものである。元雜劇本来の姿を留めていると思われるが、臺詞・ト書をほとんど収録していない。いずれも刊行年は不明。……〔元〕
- ②『脈望館抄本』……趙琦美が萬曆四十四(一六一二)～一七(一六一七)年の間に抄寫した雜劇テキスト。多くは内府本・于小穀本(于小穀(于小谷とも表記)は本名于緯。于慎行の養子)が所持していた

元雜劇テキストの明代以降における繼承について

雜劇テキストと推定される)といった、明の宮廷での上演用臺本にもとづいている。元刊本と比べると、曲の数が減少している一方で、臺詞・ト書が詳細に書き込まれている點が特徴として挙げられる。……〔脈〕

II

南曲テキスト(③④については、⑤⑥のような崑山腔・弋陽腔系に分類することが困難であるため、はじめに置く。⑤⑥は散齣集(一幕ものを集めたもの)である)

- ③『風月錦囊』徐文昭編 詹氏進賢堂重刊本 嘉靖三十二年(一五五三) スペイン・エスコリアル圖書館藏。戯曲の節略集。出版年代が比較的早く、明代初期の演劇の様相を知るには重要なテキストである。……〔風〕

- ④『新刊分類出像陶真選粹樂府紅珊』十六卷 秦淮墨客(紀振倫)編輯 唐振吾刊 萬曆三十年(一六〇二)序 嘉慶五年(一八一〇) 積秀堂覆刻本 大英圖書館藏。本文は弋陽腔系に近い。……〔紅〕

(1) 崑山腔

- ⑤『萬壑清音』八卷 止雲居士編輯 白雪山人校點 天啓四年(一六二四)序本にもとづく抄本。京都大學人文科學研究所藏 雜劇由來の演目の他、南曲の有名な段も収録する。……〔萬〕
- ⑥『新鐫出像板怡春錦』六卷 冲和居士編 刊刻者不明 崇禎年間刊本(卷四に収録される演目のほとんどは『萬壑清音』に収録されるものと一致するため校勘表からは省く)〔怡〕
- ⑦『賽徵歌集』六卷。明無名氏編。萬曆開刻巾箱本。……〔賽〕
- ⑧『群音類選』明胡文煥編。萬曆年間刊本。北曲なども収録する……〔群〕

- ⑨ 『新鵲鏡像評點玄雪譜』四卷 明鋤蘭忍人選輯 媚花香史批評明末刊本 ……〔玄〕
- ⑩ 『新鵲樂府清音歌林拾翠』初集、二集。明無名氏編。清奎壁齋、寶聖樓、鄭元美等書林覆刻本 ……〔歌〕
- ⑪ 『新刻出像點板時尙崑腔雜曲醉怡情』八卷。明青溪孤蘆釣叟編。清初古吳致和堂刊本。…〔辭〕
- ⑫ 『新刻出像點板增訂樂府冊珊集』四卷 周之標編 明末刊本 曲辭だけを収録したテキスト ……〔冊〕
- ⑬ 『綴白裘』玩花主人編選 鴻文堂梓行 乾隆四十二年（一七七七）校訂重鐫本…〔綴〕
- ⑭ 『納書楹曲譜』葉堂編 納書楹原刻 乾隆五十七年（一七九二）刊本 曲辭だけを収録したテキスト ……〔納〕
- ⑮ 『六也曲譜』光緒三十四年（一九〇八）刊本 崑曲の臺本集。曲辭に工尺（唱い方の記號）が付せられており、編集目的の一つが歌唱に供するためであったことがうかがわれる…〔六〕
- (2) 七陽腔系
- ⑯ 『新刊徽板合像滾調樂府官腔摘錦奇音』六卷 襲正我編 書林敦睦堂張三懷刻 萬曆二十九（一六一一）年刊本 内閣文庫藏 ……〔摘〕
- ⑰ 『新刻京板青陽時調詞林一枝』四卷 玄明黃文華選輯 瀛賓鄒綉甫同纂 閩建書林葉志元綉梓。「萬曆新歲孟冬月葉志元綉梓」の刊記 内閣文庫藏 ……〔枝〕
- ⑱ 『鼎鏗徽池雅調南北官腔樂府點板曲響大明春』六卷 扶搖程萬里選 冲懷朱鼎臣集 閩建書林金魁繡 刊刻年不明 尊經閣文庫藏 ……〔大〕
- ⑲ 『梨園會選古今傳奇滾調新詞樂府萬象新』八卷 殘本（目錄、前集卷一〜前集卷四） 安成阮祥宇編 劉齡甫梓 刊刻年不明デンマーク・コペンハーゲン王立圖書館藏 ……〔新〕
- ⑳ 『新刻彙編新聲雅樸樂府大明天下春』卷四から卷八のみ現存 編者刊刻年不明 オーストリア・ウィーン國立圖書館藏。…〔天〕
- III 曲選（北曲の曲辭のみ収録したテキスト。編纂段階で書き換えられた箇所もあると思われる、もとの雜劇の曲辭を残しているわけではない點は注意すべきであろう。なお、『雍熙樂府』は官版であることから、宮廷に集められていたであろう元刊本乃至は元刊本に非常に近いテキストを参照している可能性もある。）
- ㉑ 『盛世新聲』 正徳十二年（一五一七）刊。編者不明。北京圖書館藏…〔盛〕
- ㉒ 『詞林摘艶』 嘉靖四年（一五二五）劉楨序。張祿が『盛世新聲』をもとに編集。北京圖書館藏…〔艶〕
- ㉓ 『雍熙樂府』二十卷 嘉靖年間、郭勛選輯。北京大學圖書館藏…〔雍〕
- ㉔ 『詞諺』李開先（一五〇二〜一五六八）撰。嘉靖年間刻本 北京圖書館藏…〔諺〕
- IV 京劇
- ㉕ 『戲考大全』（原名『戲考』全四〇冊、一九一五〜二五年出版）上海書店 一九九〇年…〔戲〕
- II に挙げた南曲には大きな二つの流れがあり、一覽では崑山腔と七陽腔系というように示した。
- 崑山腔は、嘉靖年間、魏良輔がそれまでの演劇に改良を加えること

により成立したと言われ、受容層は主に上流階級とされる。一方弋陽腔は、崑山腔以外の劇種の中で最も勢力を持ったもので、江西弋陽を發祥の地とする。その上演においては打楽器を伴奏にして、非常に騒がしく粗野な感じのするものであったようである。したがって、受容層は主に崑山腔より下層の人々であった。弋陽腔は當時大變な人氣を博しただけでなく、各地に傳播して更に變化を遂げ、地名を冠した様々な劇種を生んでゐる。ここでは、それらを總稱して弋陽腔系とする。弋陽腔系は、これ以後の中國傳統演劇に大きな影響を與えたと考えられており、その實態について今後さらに解明を進めていく必要があると思われる。

三、「追韓信」

まず、「追韓信」(元刊本題「蕭何月下追韓信」)の場合を見てみたい。雜劇テキスト第二折・第三折が、南曲テキストにも収録されている。ここでは第二折を取り上げたい。第二折のあらすじは、劉邦の陣營を逃げ出した韓信を蕭何が追いかけて連れ戻すというものである。テキストの現存状況は次の通り。

北曲：雜劇…元刊本

曲選…『盛世新聲』『詞林摘艷』『雍熙樂府』『詞譜』

南曲：散齣集…

明代 弋陽腔…『樂府紅珊』『萬象新』『摘錦奇音』『天下春』

『詞林一枝』

明代 崑山腔…『萬壑清音』『怡春錦』『群音類選』『珊瑚集』

『醉怡情』『賽徵歌集』『歌林拾翠』

清代 崑山腔…『六也曲譜』『納書楹曲譜』

元雜劇テキストの明代以降における繼承について

完本…富春堂刊『韓信千金記』第二十二折

汲古閣六十種曲『千金記』第二十二折

「追韓信」においては、雜劇のテキストは元刊本のみである。曲選というものは、北曲の曲辭だけを収録したものである。完本というのは長篇南曲のことである。『千金記』には、複數のテキストが存在するが、筆者が目撃し得たのは、ここに擧げた富春堂本と汲古閣本の二種類のテキストである。長篇化した南曲である『千金記』の第二十二折に、もとは雜劇の一場面である「追韓信」が取り込まれており、南曲が長篇化する際の過程の一端を示しているようで大變興味深い。

元刊本「追韓信」は、正末が扮する韓信一人の唱だけで構成されているが、南曲テキストでは、南曲による蕭何の唱などがつけ加えられており、南曲らしい改變がなされている。しかし、南曲らしい改變がなされてはいるのだが、韓信の唱の歌詞には、元刊本と系統を同じくするとおぼしい曲辭が用いられているのである。【沈醉東風】を例に擧げて比べてみよう。(■は判讀不能。異體字は正字體に直す。臺詞の位置を*1・*2……で示し、曲辭の後にまとめて記す。以下同じ。『詞林摘艷』は『盛世新聲』と、『珊瑚集』は『萬壑清音』とほぼ同文のため省略)

(元) 不覺的皓首蒼顏。 就月朗回頭 把劍看。 *1百忙里■

不乾我 英雄 淚眼。 把劍彈。 百般的搵

(盛) 不覺的皓首蒼顏。 對着這月朗回頭 把劍彈。 百忙里搵

不住我這英雄 淚眼。 對着這月朗風清 把劍彈。 百忙里搵

不住我這英雄 淚眼。 對着這月朗星輝 把劍彈。 ×××搵

(謙) 不覺的赧色羞顏。 對着這月朗星輝 把劍彈。 ×××搵

- 不住× 英雄 淚眼。
 〔紅〕 不覺的皓首蒼顏。對着這月朗回頭 把劍彈。 *1 百忙裏搵
 不住× 英雄 淚恨。
 〔天〕 不覺的皓首蒼顏。對着這月朗回頭 把劍彈。 *1 百忙裏搵
 不住× 英雄 泪眼。
 〔寬〕 不覺的皓首蒼顏。對着這月朗回頭 把劍彈。 百忙裏搵
 不住× 英雄 淚眼。
 〔萬〕 不覺的皓首蒼顏。對着這月朗回頭 把劍彈。 ×××搵
 不住× 英雄 淚眼。
 〔△〕 不覺的皓首蒼顏。對着這月朗回頭只是把劍彈。 百忙裏搵
 不住× 英雄和那泪眼。
 *1 〔元〕 忽然傷感、默上心來。
 *1 〔紅〕 默然感想上心來。
 *1 〔天〕 默然傷感、不覺泪零。
 〔元刊本譯〕 氣付かぬうちにすっかり年老いて、月明のもと振り返って劍を見る。(せりふ：急にも悲しさが心にこみ上げる) とっさには我が英雄の涙をぬぐい盡くすことはできぬ。
 このように多少の改變を生じてはいるが、元刊本の曲辭が清代のテキストにまで受け繼がれていることは、特に注目すべきであろう。曲選は南曲の諸テキストより早い時期に成立しているが、南曲テキストの曲辭に影響を與えておらず、また、元刊本に見えるせりふが、多少の改變はあるものの『樂府紅珊』や『陽腔系テキスト』にも類似した形で見えていることから、曲選とは別の経路で南曲テキストに受け繼がれていった可能性が高いであろう。
 このように南曲テキストの曲辭・せりふに元刊本の影響が濃厚に見

られるのであるが、これこそ雜劇テキストの曲辭がそのまま南曲テキストに取り込まれてしまった姿なのである。雜劇の明代における繼承のパターンの一つは、雜劇をそのまま取り込んだ上に、南曲による唱を増補するという方法をとるものがあったのである。

四、「東窗事犯」

「東窗事犯」は「追韓信」とは異なるパターンの例として取り上げたい。「東窗事犯」は有名な嶽飛に關する物語を扱った芝居で、元刊雜劇第二折は、秦檜が嶽飛を謀殺した後、贖罪のために靈隱寺を訪れたところ、地藏王が姿を變えた風和尚という僧に責められるという内容である。「東窗事犯」劇に關しては、『南詞斂錄』の記述(「宋元舊篇」として「秦檜東窗事犯」という演目が見える)、また『永樂大典目錄』に「東窗事犯」という劇名が見えることから、宋元南戲に由來するとも言われているが、宋元南戲のテキストが現存しないためこの點についてはここで言及しない。現存するテキストは次の通りである。

北曲系…元刊「東窗事犯」第二折

『萬壑清音』・『綴白裘』・『納書楹曲譜』・『戲考大全』

南曲系…『風月錦囊』・『群音類選』

完本…富春堂『東窗記』第三十一折「秦檜遇風和尚」

汲古閣六十種曲『精忠記』第二十八齣「誅心」

この芝居には、元刊本の曲辭の系統を引く北曲系と、南曲による曲辭からなる南曲系の二種類のテキストが併存する。ただし、元刊本以外はいずれも南曲テキストであり、元刊本の曲辭の系統をひくテキストも、南曲として上演(あるいは繼承)されていた點には注意が必要である。北曲系のテキストの中で特に注目されるのは、京劇の脚本集

である『戲考大全』に収録されていることである（京劇での題名は「瘋僧掃秦」）。つまり、元雜劇最古のテキストである元刊本の曲辭が、現代に行われている京劇にまで繼承されているのである。本来、京劇は曲辭の一句の長さがほぼ揃った齊言體のスタイルをとる詩讀系演劇であり、雜劇や南曲など長短句からなる樂曲系演劇とは形式面などで異なっている。しかし、崑曲（崑劇・崑山腔）の演目が京劇にそのまま取り入れられることも少なくない。「東窗事犯」劇の場合も、崑曲から京劇に取り入れられた例になるわけだが、元雜劇が崑曲を經由して現在の京劇の中に繼承されているというのは大變珍しい。

「東窗事犯」では、粗筋はほぼ共通するものの、北曲系と南曲系では、曲牌の配列、曲辭に違いが見られる。しかし兩者が全く無關係かという点、簡單に割り切ることが出来ない。北曲系・南曲系それぞれから本文を引いて見てみよう。

○北曲系：元刊「東窗事犯」第二折

【粉蝶兒】①休笑我垢面風癡。②恁參不透我本心主意。③子與世人愚不解禪機。④鬚鬢着短頭髮、⑤胯着个破執袋、⑥就裏敢包羅天地。⑦我將這吹火筒却離了香積。⑧我泄天機故臨凡世。

○南曲系：『風月錦囊』による

【園林好】你笑我風魔蠢①、我和你其中見識、參不透吾心主②。不解我這禪識③。試聽我端細。

曲牌・曲辭は異なっているが、同じ番號を付けた句が類似していることがわかる。また次に擧げる箇所もみてみよう。

北曲系【石榴花】第三、四句

〔元〕

當時不信

大賢妻。他

曾苦苦地勸你。

〔萬〕你可也悔當初不聽 你那大賢妻。他也曾屢屢的可便勸你。

元雜劇テキストの明代以降における繼承について

〔綴〕 您可也悔當初錯聽了恁那大賢妻。他也曾屢屢的誘你。
〔納〕 恁可也悔當初錯聽 恁大賢妻。 他也曾屢屢的 便誘你。
〔戲〕 恁可也悔當初錯聽 恁大賢妻。 也曾屢屢的 便誘你。
南曲系【品令】第七、九句（富春堂本は【三臺令】に作る。臺詞は省略。）

〔風〕 我從到、 你可便索索計。 若信我言、 昔日休聽不賢妻。

〔富〕 我從頭至尾。 你可須索繫記。 若信我言、 昔日休聽不賢妻。

〔汲〕 ×從頭至尾。 你×須索牢記。 若聽吾言、 昔日休聽大賢妻。

いずれも風和尚が秦檜に向かって言っているところ。北曲系の譯は、元刊本「そのかみ優れた賢妻の言うことを聞かず、彼女はしきりに（嶽飛謀殺をやめるように）諫めていたのに」、「萬壑清音」もおおよそ同内容であり、元刊本と『萬壑清音』では秦檜の妻は善人という設定である。『綴白裘』『納書楹曲譜』『戲考大全』「おぬしはなんとまあそのかみかの大した賢妻の言うことをうっかり聞いてしまい、彼女もしきりと（嶽飛を謀殺するように）おぬしを唆した」となり、こちらでは悪人という設定である。南曲系の譯は「わしがはじめからおしまいで話すから、おぬしはしかと心に留められよ。もしわしの言うことを信じるなら、そのかみ愚かな妻の言葉を聞くべきではなかった」となり、秦檜の妻は悪人である。汲古閣本では「大賢妻」となっているが、意味は同じである。一般的に秦檜の妻は、南曲系に見られるような嶽飛謀殺を唆す悪人という設定が普通であり、元刊本と『萬壑清音』のように嶽飛謀殺に反対する善人という設定であるのは非常に珍しい。しかし、元刊本の系統を引く北曲系の『綴白裘』『納書楹曲譜』『戲考大全』で秦檜の妻が悪人という設定になっているのは、南曲系のテキストの影響を受けたものと考えられる。このように曲辭が異なる

るにもかかわらず、内容的に影響關係が見られる點も興味深い。

ここに挙げた箇所にとどまらず、北曲系と南曲系では曲辭・臺詞ともに類似した部分があり、兩者の間に影響關係があることがうかがえる。このことと版本の成立時期とを考慮に入れれば、「東窗事犯」の明代以降の繼承は次のように考えられる。明代には相互に影響關係にある北曲系と南曲系の二系統が併存するという状況が見られた。その後、清代以降には南曲系がすたれ、北曲系が主となって、それが現代の京劇にまで受け継がれているということになるのであろう。

五、「單刀會」

「單刀會」の場合を見てみたい。「單刀會」は三國志物語の一場面を扱った芝居であるが、そのあらすじは、吳の魯肅が劉備に貸した荊州を取り戻そうとして、關羽を酒宴に招いて話を付けようとするが、關羽は逆に魯肅を脅して悠々と引き揚げていく、というものである。「單刀會」劇各折の現存するテキストを擧げてみよう。

第一折 雜劇：元刊本・脈望館抄本

南曲：弋陽腔系…『天下春』『樂府菁華』『大明春』『樂府紅珊』

〔樂府紅珊〕は弋陽腔系テキストに近いため、ここでは弋陽腔系に分類した。第三折も同じ)

第二折 元刊本・脈望館抄本(雜劇テキストのみ)

南曲：崑山腔…『綴白裘』『納書楹曲譜』『六也曲譜』(いずれも清刊本)

弋陽腔系…『天下春』『萬象新』『大明春』『樂府紅珊』(いずれも明刊本)

珊』(いずれも明刊本)

第四折 雜劇：元刊本・脈望館抄本

南曲：明代『風月錦囊』『樂府紅珊』『萬壑清音』『怡春錦』『玄雪譜』『珊珊集』

清代『綴白裘』『納書楹曲譜』『六也曲譜』(いずれも崑山腔)

實は元刊「單刀會」の原本には缺損があるのである(圖版参照)。その範圍を曲牌で擧げると、第三折の末尾【柳青娘】【道和】【尾】、第四折【新水令】【駐馬聽】【風入松】【胡十八】【慶東原】【沈醉東風】【雁兒落】、合計十曲に及ぶ。特に缺損の度合いが甚だしいのは、【柳青娘】【道和】【尾】【風入松】の四曲である。そしてこのうち【尾】を除く三曲は、他のテキストに繼承されていない。たとえば【風入松】は次のようになっている。

文學德行與…(八字原缺)：國能謂不休說。一時多少豪傑。人生百年…(七字原缺)：不奢。

このように文意が不明確になっている部分が繼承されていない。これは何を意味するものであろうか。おそらく、缺損によって文意が不明確になったために、後代のテキストに繼承されなかったと考えられるであろう。つまり、「單刀會」における繼承は、缺損箇所を含むテキストをもとにしてしていると推測されるのである。第三折末尾の【尾】曲も缺損が多いが、この曲の場合、折の末尾に必要な曲であるため、例外的に補われたものであろう。先に挙げた三曲以外の曲はいずれも缺損が少なく、缺損部分が補われていると見なすことができよう。

それでは、缺損部分がどのように補われているか、【尾】を擧げて見てみよう。(傍線は異同、点線は缺損部分を示す。以下同じ)

第三折【尾】(抄本は【尾聲】、六・納本は【煞尾】)に作る。弋陽腔系の『天下春』『樂府紅珊』は前曲【鮑老催】からの(續き)

〔元〕 須……(七字原缺) ……公。 又無那宴鴻門 楚霸王。行下 滿筵人都……(八字原缺) ……你前日上。放心、小可如我萬軍中下馬刺……(以下原缺)

〔脈〕 須無那會臨潼 秦穆公。 又無那 鴻門會楚霸王。折麼他 滿筵人×列着 先鋒將。 ×××× ×× 小可如×萬軍××刺顏良時 那一場攘。〔下〕*2

〔綴〕 雖不比×臨潼會上秦穆公。 那裏有宴鴻門 楚霸王。滿庭前折磨了 英雄將。 ×××× ×× 小可的百萬人軍中××斬顏良 那一場攘。〔同下〕

〔納〕 雖不比×臨潼會上秦穆公。 那裏有宴鴻門 楚霸王。滿眼前折沒了個英雄將。 ×××× ×× 俺也曾百萬人軍中××斬顏良 那一場攘。

〔六〕 雖不比×臨潼會上秦穆公。 那裏有宴鴻門 楚霸王。滿筵前折磨了 英雄將。 ×××× ×× 俺也曾百萬人軍中××斬顏良 那一場攘。

〔紅〕 他沒有×臨潼會 秦穆公志量。 怎比得 鴻門宴楚霸王的行藏。 *1好一似白馬坡前誅文丑。 ×××× ×× ××××百萬人軍中××刺顏良。 魯子敬呵教你一場空想。

〔天〕 他沒有×臨潼會 秦穆公志量。 怎比得 鴻門宴楚霸王的行藏。 *1好一似白馬坡前誅文醜。 ×××× ×× ××××百萬人軍中××刺顏良。 魯子敬 教你一場空想。〔重〕

(*1・*2の臺詞は省略)

(元刊本譯：(臨潼會の秦穆)公ではあるまいし、また鴻門會の

元雜劇テキストの明代以降における繼承について

楚霸王項羽でもあるまい。宴席中の者に下知して(先鋒將を並べたとて) 你前日上(意味不明)。安心せよ、一萬の軍中で馬を下り(?) (顏良を?) 刺したこのわしにはかなうまい。)

(天下春譯：やつ(魯肅)は臨潼會の秦穆公ほどの器量なく、鴻門の宴での楚の霸王ほどの振る舞いにも及ばぬ。白馬坡で文醜を殺し、百萬人の軍中で顏良を刺したようにしてやろう。魯子敬よ、あだな謀事であったな。)

元刊本【尾】には三箇所补缺があるが、第一句の缺损は第二句の「楚霸王」からの類推で補ったと思われる。第三句の缺损部分には「列着先鋒將」が補われ、そのあとの「你前日上。放心」は、意味がわからなくなり削られたと考えられる。末句では、「刺顏良」という言い方が小説・戯曲でよく使われること、元刊本原本で「刺」字以下の缺けている字數分を埋めようとしたことから、「顏良時那一場攘」の句が補われたと思われる。「下馬」の二字は、單に削られてしまったのであろう。

このように【尾】曲において、元刊本の缺损部分と脈望館抄本の異同を見てみると、現存する缺损がある元刊本にもとづいて脈望館抄本に見える曲辭が作られている可能性が考えられる。

第四折【胡十八】關羽の唱 (『風月錦囊』は【那吒令】に作る)

〔元〕 恰一國興、早一朝滅。 那……(八字原缺) …… 二朝阻隔六年 別。不付能見也。 却又早 老……(八字原缺) …… 心兒 喚一夜。

〔脈〕 想古今、立勳業。 那裏也舜五人、漢三傑。 兩朝相隔數年 別。不付能見者。 却又早 老也。 開懷的飲數杯。

*5 盡心兒待醉一夜。*6

〔風〕 想古今、立勳業。 那里有舜五人、漢三傑。 兩朝×隔
數年間別。 不×能會也。 却又早 老也。 開懷暢飲、莫
負權悅。

〔紅〕 想古今、立勳業。 *1×××舜五人、漢三傑。 *2兩朝相隔
數年 別。 不復能見也。 *3却又早 老也。 *4且開懷暢飲、莫負
權悅。 *5 開懷處飲數盃、莫放金杯歇。 *6

〔萬〕 想古今、立勳業。 *1那裏有舜五人、漢三傑。 *2兩朝相隔
數年 別。 不×能會也。 却又早 老也。 *4 開懷×飲數盃。
不覺的盡心醉也。 *6

〔綴〕 想古今、立勳業。 *1那里有舜五人、漢三傑。 兩朝相隔
只這數年 別。 不獲能個會也。 恰又早這般老也。 *4 開懷來
飲數杯。 *5 大夫某 只待盡心兒可便醉也。 *6 (萬・恰・玄
・珊は同じ。綴・六は同じ)

〔元刊本譯〕一國興るや、一朝滅ぶ。…(原缺)…二つの國が相
隔たつてより六年の別れ、ようやく會えたと思つたら、なんとは
や年老いて…(原缺)…心ゆくまで一晩笑つて過ごそうぞ。

〔脈望館抄本譯〕古今勳業を立てしことに思いを馳せれば、舜の
五人、漢の三傑などどこにいようか。兩國が相隔たつてより數年
の別れ、ようやく會えたと思つたら、なんとはや年老いてしまつ
た。おおらかに杯重ね、心ゆくまで飲み明かそうぞ。

元刊本第三句の缺損部分では、脈望館抄本やその他のテキストに
「里也舜五人、漢三傑」という句を補っているが、元刊本第一句・第
二句「恰一國興、早一朝滅」も他のテキストでは「想古今、立勳業」
に改められているのは、缺損部分に「里也舜五人、漢三傑」という句

を補つたためと考えられるであろう。元刊本の缺損部分に本来存在し
ていた句は、脈望館抄本に見える曲辭とは異なつたものであつたのか
もしれない。元刊本第七句「却又早老」以下の缺損については、末句
「心兒咲一夜」から類推して、脈望館抄本では「(老)也。開懷的飲數
杯。盡心兒待醉一夜」としてゐると思われる。その他の南曲テキスト
では、様々な異同が見られるが、基本的には脈望館抄本に見える曲辭
「也。開懷的飲數杯。盡」の影響を受けていると考えるのが妥當であ
らう。

以上の諸點を總合すると、脈望館抄本に見える曲辭は、今日傳存し
てゐるたつた一冊の缺損のある元刊本をもとにして、缺損部分を補つ
て作られた可能性が非常に高いと考えられるであろう。明本では、元
刊本より曲牌數が減少する例が多いが、「單刀會」の場合はおそらく
それとは異なるパターンであつて、缺損によつて曲牌が減少したと見
るべきであろう。元刊雜劇三十種の中では他にも、「任風子」第二折
【呆古呆】が缺損により明本に繼承されていないと思われる。なお、
「單刀會」の脈望館抄本は、その體裁などから于小穀本と考えられ、
その本文は脈望館抄本の抄寫時期に先立つことになるので、于小穀本
乃至はそれに非常に近いテキスト(以下話を單純化するため、單に于
小穀本とする)が成立する段階で補われたものであらう。

次に『風月錦囊』をはじめとする南曲テキストへの繼承を見てみよ
う。南曲テキストのうち成立年代が早い『風月錦囊』(嘉靖三十二年
(一五五三)の刊記)と『樂府紅珊』(萬曆三十年(一六〇二)序)は、
脈望館抄本の抄寫(一六一二〜一七一)より早い時期に成立しており、
脈望館抄本から直接影響を受けたとは考えにくい。したがつてこれら
二種の南曲テキストの成立については、于小穀本が何らかの経路で民

間に流出し、南曲テキスト成立に影響を与えたと推測するのが妥當であろう。『風月錦囊』は、その成立を永樂年間とする説もあるが、現存する『風月錦囊』の「單刀會」の成立時期については、少なくとも于小穀本より後れると見てよいであろう。于小穀本の主要部分の成立を成化年間とする小松氏の推定とも矛盾しない。

このように「單刀會」雜劇の場合においても、明代以降の「單刀會」の繼承は、元刊本を起點として見るように見える。特に注目すべきは、元刊本「單刀會」原本に缺損が存在し、缺損部分に該當する明本の部分が後補されたものであると推測できることから、現存する元刊本「單刀會」が明本のもとなつた可能性は非常に高いと思われる。

もしこのことが事實であれば、これは文字テキストを介した繼承とすることになり、直接的に上演を介した繼承ではないということを示していることになる。とすれば、「單刀會」の實演の傳統が、この時點で途切れていた可能性も想定できるであろう。もしかりに別系統の「單刀會」劇が存在していたとしても、この「單刀會」が宮廷外へ流出し、主流になつてしまつたと考えられる。

上演を介した繼承ではなかつたとしたら、元刊本は、明代以降どのように伝えられてきたのか。明代初期における元刊本の所在は明らかにされておらず、明代中期になつてようやく手がかりとなる記述が現れる。岩城秀夫氏はその論文「元刊古今雜劇三十種の流傳」の中で、李開先『詞譜』に見える「追韓信」に關する記述などから、嘉靖年間の李開先がこの書を所藏していたことがあつたと推定しておられる。李開先の後は、孫楷第『也是園古今雜劇考』によれば、清の何焯（字心反、號小山、長洲人）が實際に目睹し、所藏していた脈望館抄本と元刊本との校勘を行つており、その後、黃丕烈の手に渡つたといふこ

とのようである。とはいへ、現時點では、明代中期李開先の所藏に歸す以前における元刊本の流傳について、明らかにされていない狀況である。

しかし、元刊「單刀會」が、明の内府を経由してきた雜劇テキスト（本稿では脈望館抄本を指す）のもとなつたテキストであつたのであれば、元刊「單刀會」は明の宮廷に集められていたテキストであつたという可能性が考えられる。そもそも雜劇をめぐつては、元から明への繼承が如何なるものであつたのかといふことは重要な問題である。もしも、實際に元刊本が明の宮廷を経由したのであれば、それは雜劇の繼承過程において、明の宮廷が非常に大きな役割を果たしていたことを改めて示すことになるであろう。

六、「單刀會」における崑山腔と弋陽腔系

「單刀會」における崑山腔テキストと弋陽腔系テキストの異同狀況から、明代以降の雜劇繼承の一つのパターンを見ることが出来る。この點について述べてみたい。

先に挙げた第三折【尾】では、脈望館抄本に見える曲辭が崑山腔と弋陽腔に繼承されていた。崑山腔テキストは脈望館抄本に近く、弋陽腔系テキストは脈望館抄本と崑山腔テキストからかけ離れているように見える。しかし、「單刀會」第三折においては、テキスト一覽で示したように、弋陽腔系のテキストはいずれも明代に刊行されているのに對し、崑山腔テキストは清代の刊行であるので、現存するテキストの刊行年代を見る限り、崑山腔テキストが弋陽腔系テキストに影響を与えているとは考えにくい。このことを曲牌からも確認してみると、元刊本と脈望館抄本に見える【快活三】【鮑老兒】【剔銀燈】【蔓菁采】

(脈本は【蔓菁菜】の曲牌表示がなく、曲辭の一部だけが存在する)の四曲が、崑山腔テキストでは繼承されていない。一方、弋陽腔系テキストでは曲牌こそ異なっているものの、この三曲の言葉が異なる曲牌に使われている。

具體的な例として、元刊本・脈望館抄本・『天下春』(弋陽腔系テキスト)の三種を挙げてみよう(元刊本の本文を適宜かぎ括弧で區切つて番號を振り、番號は脈望館抄本・『天下春』と對應している。異同箇所は傍線を付す)。

○元刊本(■：判讀不能)

【別銀燈】折末他「①雄糾糾軍排成殺場。威凜凜兵屯合虎帳。大將軍奇銳在孫吳上。」②倚着馬如龍人似金剛。「③不是我十分強。硬主仗。」④題着斬殺去摩拳擦掌。」

【蔓菁菜】他便有快對付能征將。排戈戟列■倉(當作旗鎗)。「⑤對幃。三國英雄漢雲長。端的豪氣有三千丈。」

○脈望館抄本

【別銀燈】折莫他「①雄糾糾排着戰場。威凜凜兵屯虎帳。大將軍智在孫吳上。」②馬如龍人似金剛。「③不是我十分強。硬主張。」

④但題起斬殺呵摩拳■掌。」

【蔓菁菜】排戈甲列旗鎗。「⑤各分戰場。我是三國英雄漢雲長。端的是豪氣有三千丈。」

○『天下春』【鮑老催】の途中まで

【鮑老催】那怕他「②馬如龍人似金剛。」①雄糾糾推乘出戰場。威凜凜兵戈賽虎狼。大丈夫志在孫吳上。」※今日向單刀會裡、「勝似鎖齊王。」③非是我十分強。硬主張。」(他若提起那荊州呵)。「④準備着貫甲披袍、仗劍提刀、一個個摩拳擦掌。」⑤各分戰場。

端的は三分英勇漢雲長。怒開豪氣三千丈。」(※の句は元刊本・脈本【鮑老催】曲中に見えるが、【鮑老催】曲は省略した)

(元刊本譯：【別銀燈】たとえやつが戦いの場に勇ましい軍をならべようとも、陣幕のまわりに威勢のいい兵を駐屯させようとも、この大將軍のすばらしさはあの孫吳の兵法(吳のやつら)の上だ。馬は龍のよう人は仁王のよう、それこそ頼り。わしはすごく強いと言つて、無理に事を起こそうとするでもないが、いざ戦いというのならやる氣は十分じゃぞ。

【蔓菁菜】やつにたとえ手強い兵、戦になれた將がいようとも、矛や旗、槍をならべようとも、いざ手合わせとなれば、三國に名高い英雄漢の雲長、げにも豪氣は三千丈。)

(『天下春』譯：【鮑老催】たとえ彼が馬は龍のよう人は仁王のようであっても、戦いの場に勇ましく出てこようとも、威風堂々たる兵器が虎や狼にもまさるとも、立派な男たるわが心意氣は孫吳の兵法(吳のやつら)の上だ。只今單刀會にては、齊王を閉じこめるにもまさる(?)。わしはすごく強いと言つて、無理に事を起こそうとするでもないが、(せりふ：やつがもしも荊州のことを言い出したら)、よろいや陣羽織を身につけ、劍や刀を用意して、一人一人やつつけてやるぞ。)

このように、『天下春』では、雜劇テキストの歌詞を用いながら、パズルのように順番を入れ替えている。それにもかかわらず、雜劇の話の流れに大きな變更を生じていないのは、雜劇テキストの【上小樓】から【尾聲】までを、だいたい前半と後半に分け、それぞれの中で入れ替えを行っているからであろう。『天下春』に見える、このような曲辭の入れ替えは、第一折の弋陽腔系テキストにも同様に見ら

れる。

第一折・第三折において、『樂府紅珊』と『天下春』とは、ほぼ同文である。したがって、この部分からも、先に述べた「單刀會」の繼承過程と一致していると言えよう。すなわち、雜劇テキストあるいは于小穀本が民間に流出し、そして南曲に取り込まれて入れ替えが行われ、『樂府紅珊』や、『天下春』等の弋陽腔系テキストにも収録されたということになるのであろう。

このように本文の異同状況などから総合すると、崑山腔テキストから弋陽腔系テキストが作られたのではないことは明らかである。それでは、崑山腔テキストと弋陽腔系テキストの異同から、どのような状況が考えられるであろうか。

七、明代後期における北曲の受容

弋陽腔系テキストは實演用臺本に近い姿を留めていると考えられる。同じ芝居でもテキストによってはかなり異同が生じている場合があり、その要因には、文字テキストを寫す際に生じた微細な違いばかりではなく、實演からの影響もあったと考えられるであろう。弋陽腔系テキストは散齎集、つまり一幕ものの寄せ集めという形態を取っているが、これも、折子戲（一幕ものの芝居）として行われることが多かったことを示しているのかもしれない。弋陽腔系テキストにおいて入れ替えのような改變が爲されたのは、雜劇そのままでは弋陽腔としては上演しにくかったという、實演を背景とした要因が考えられるであろう。これは、弋陽腔という劇種の性質として、もとの雜劇のスタイルを保持しようという意識が乏しいというよりは、次から次へと變化を遂げてゆく生命力の強さがあるということなのであろう。

元雜劇テキストの明代以降における繼承について

一方、崑山腔のテキストは、元刊本や脈望館抄本の系統に近いものを繼承している。では、崑山腔が弋陽腔系テキストよりも雜劇テキストの本文に近い形を残しているのは、何故なのだろうか。このことは、崑山腔の形式が雜劇を取り入れやすかった、ということのみ示しているのではないと思われる。むしろ崑山腔は北曲の形式などを生かす方向で、崑山腔に取り入れようとする姿勢があったと考えるべきなのかもしれない。明代中期以後、雜劇テキストの刊行が盛んに行われているが、その背景には所謂知識人の間で、雜劇が高尙で雅なる演劇として愛好されていたことを見逃すことは出来ないであろう。

當時の知識人の著作から、北曲愛好を示す例を挙げてみよう。明末の沈龍綏（字君微、號適軒主人、萬曆江蘇吳江人）に、『絃索辨訛』という著作がある。絃索（絃索に同じ）というのは、弦樂器（琵琶や三弦など）で伴奏をつけ、これに合わせて北曲を清唱するというものである。さてこの『絃索辨訛』には、弦索用に北曲の歌詞に唱い方の記號が付されており、「追韓信」劇の歌詞も収録されている。『絃索辨訛』の「追韓信」〔絃索辨訛』では「千金記・追賢」に作る）は、元刊本の曲辭よりも南曲テキストの曲辭に近いものになっているのである。つまり、『絃索辨訛』はすでに南曲化した芝居、この場合には長篇南曲の『千金記』の中から北曲部分を取り出してきているのであり、それが著者にとっての「北曲」だったのである。知識人の北曲に對する意識が高まったとはいえ、彼らが「北曲」と認識していたものの中には、南曲の中の「北曲」もかなり含まれている可能性があることがうかがわれる。

こうした状況には、雜劇が宮廷外では一般に芝居として行われなくなっていたことが要因の一つに考えられるであろう。明代のいつごろ

とはっきりと特定することは困難であるが、少なくとも明の後期には北曲が南曲として繼承されていた状況があったことは、注意すべきことと思われる。

八、おわりに

元刊本が、明代以降どのように繼承されたのか、これまで述べてきたことをまとめておきたい。まず、「追韓信」においては、雜劇の曲辭をそのまま繼承し、南曲の唱を挿入するパターンが見られた。「東窗事犯」では、北曲系と南曲系という互いに影響關係が認められる二つの系統があり、後に北曲系が京劇に繼承されている状況が見られた。「單刀會」では、明代以降のテキストは、元刊本の缺損部分を補う形で繼承している可能性が高いと推定される。このことは、現存する元刊本が明の宮廷に由來するテキスト(脈望館抄本)のもとになったというだけでなく、この元刊本が明の宮廷と何らかの密接な關わりを持っていただけでなく、そして雜劇の繼承過程において、明の宮廷が果たした役割が非常に重要なものであったことをあらためて示していると思われる。

また、雜劇は明代以降、民間では上演されなくなっていたと言われるが、全く上演されなくなってしまうかというところではなく、崑山腔や弋陽腔の中の北曲として演じられ、あるいは長篇南曲の一部分として取り込まれ、一部には現在に至るまで上演され続けているものも存在していたのである。しかも、その繼承のあり方は決して一様ではなく、崑山腔と弋陽腔とでは異なる展開を見せていったのである。本稿ではごく一部の例を挙げるにとどまったが、今後更に廣く資料を用いて、雜劇と南曲の全面的な關係を明らかにしていきたい。

注

- (1) 本稿では「元雜劇」を、元代に行われていた雜劇に限って使用することにする。
- (2) 岩城秀夫「元刊古今雜劇三十種の流傳」(『中國戲曲演劇研究』(創文社 一九七三) 五四七頁)。
- (3) 孫楷第「也是國古今雜劇考」(上雜出版社 一九五三)に、李開先張小山小令後序稱「洪武初年親王之國、必以詞曲一千七百本賜之……人言憲廟好聽雜劇及散詞、搜羅海內詞本殆盡。武宗亦好之、有進者即蒙厚賞……」と引く。
- (4) この套數を雜劇では普通「折」と呼び、雜劇は四折から構成されると説明されることが多い。これについては、岩城秀夫「元雜劇の構成の關する基礎概念の再檢討」(『中國戲曲演劇研究』(創文社 一九七三) 四八六頁以下に詳しく述べられている。ただし、元刊本に見える折というのは「ひとしきり」という意味で、明本の折とは中身が異なっている。
- (5) 各テキストの底本は次の通り。①と②は『古本戲曲叢刊四集』、③、④、⑤は『善本戲曲叢刊』(學生書局)、⑥は臺灣中華書局影印本、⑦⑧は『海外孤本晚明戲劇選集』(上海古籍出版社 一九九三)による。なお『怡春錦』『群音類選』『綴白裘』には崑山腔以外の劇種による演目も含まれていると思われるが、本稿で扱う「單刀會」は崑山腔のもので認めうるので、ここでは崑山腔に分類した。
- (6) 注3孫楷第前掲書「一 收藏」に、趙琦美に關する詳しい考證がある。
- (7) 脈望館抄本と于小穀については、小松謙「中國古典演劇研究」(汲古書院 二〇〇一) II 「明代における元雜劇」第三章「脈望館抄古今雜劇」考」参照。
- (8) 王重民「中國善本書提要」(上海古籍出版社 一九八三)の分類による。
- (9) 注7小松前掲書 II 「明代における元雜劇」第五章「元曲選」『古今名

劇合選』考」一七三頁参照。

- (10) 弋陽腔に關しては葉德均「明代南戲五大腔調及其支流」(『戲曲小說叢考』〔中華書局 一九七九〕上册所收)に詳しい。弋陽腔の特徴としては、「滾調」と呼ばれる特徴的な唱の挿入が擧げられるが、本稿で扱った「單刀會」には「滾調」の挿入は見られないため、この點は特に觸れない。

(11) 弋陽腔系のテキストとしては、注4に擧げた『善本戲曲叢刊』に九種、『海外孤本晚明戲劇選集』に三種收められている。

(12) このほか、『綴白裘合編』にも收録されているようである。根ヶ山徹「明刻清康熙間重修本『綴白裘合編』初探」—『綴白裘』の成書と轉變—(『東方學』第九十三輯 一九九七)の『綴白裘合編』目録一覽参照。

(13) 富春堂本と汲古閣本とでは、兩者の本文は非常に共通しているが、唯一異なっている箇所は第二十六折「登拜」である。

(14) 元刊本の「默」は意味的には「幕」(急に)である。『樂府紅珊』や『天下春』の「默然」は元刊本の「默」が影響しているのかもしれない。

(15) 『戲考大全』〔上海書店 一九九〇〕(原名『戲考』全四〇冊、一九一五—二五年出版)を使用。

(16) この他、『樂府南音』二卷(萬曆間刻、洞庭簫士選輯、湖南主人校點、刊刻者不明)があるが、『珊珊集』と同文(版式も全く同じ)のここでは省く。兩者には直接的な關係があると思われる。

(17) 注7小松前掲書Ⅱ「明代における元雜劇」第三章「脈望館抄古今雜劇』考」一四七頁。

(18) 注7小松前掲書参照。

(19) 底本には『中國古典戲曲論著集成』を使用。

(20) 元刊本以外の雜劇テキストの場合も、南曲テキストへの影響を及ぼしている事例を見出すことが出来る。たとえば、『抱粧盒』(『元曲選』所收)・『寶娥冤』(古名家本など)は、南曲テキストである『金丸記』・

元雜劇テキストの明代以降における繼承について

『金鎖記』の中に一場面として取り入れられている。

三千六百 (無) (無) 他止不 (金) 六行教 (仙) (沈) 秦 (畫)

我承能來 (我) (我) 我 (我) 我 (我) 我 (我) 我 (我) 我 (我) 我 (我)

金 (金) 玉 (玉) 我 (我) 我 (我) 我 (我) 我 (我) 我 (我) 我 (我) 我 (我)

衣 (衣) 卸 (卸) (我) (我) 我 (我) 我 (我) 我 (我) 我 (我) 我 (我) 我 (我)

生 (生) 我 (我) 把 (把) 物 (物) 之 (之) 國 (國) 國 (國) 國 (國) 國 (國) 國 (國)

謝 (謝) 之 (之) 為 (為) 竟 (竟) 也 (也) 你 (你) 兄 (兄) 之 (之) 心 (心) 也 (也) 及 (及) 又 (又) 在 (在) 家 (家) 難 (難)

本 (本) 色 (色) 之 (之) 精 (精) 神 (神) 衣 (衣) 冠 (冠) 之 (之) 羅 (羅) 帶 (帶) 如 (如) 水 (水) 似 (似) 被 (被) 傷 (傷) 感 (感)

木 (木) 的 (的) 死 (死) 尸 (尸) 骸 (骸) 骨 (骨) 滿 (滿) 之 (之) 侯 (侯) 陽 (陽) 注 (注) (我) (我) 不 (不) 學 (學)

公 (公) 又 (又) 生 (生) 那 (那) 家 (家) 陰 (陰) 以 (以) 英 (英) 霸 (霸) 王 (王) 行 (行) 下 (下) 浦 (浦) 幾 (幾) 父 (父) 都 (都)

你 (你) 前 (前) 日 (日) 上 (上) 我 (我) 心 (心) 小 (小) 刁 (刁) 奴 (奴) 力 (力) 爭 (爭) 也 (也) 不 (不) 臣 (臣)

命 (命) 久 (久) 云 (云) 住 (住) 一 (一) 打 (打) 不 (不) 爭 (爭) 云 (云) 不 (不) 臣 (臣)

姓 (姓) 不 (不) 弟 (弟) 文 (文) 字 (字) 弟 (弟) 弟 (弟) 弟 (弟) 弟 (弟) 弟 (弟) 弟 (弟) 弟 (弟) 弟 (弟) 弟 (弟) 弟 (弟) 弟 (弟)

你 (你) 真 (真) 小 (小) 可 (可) (我) (我) 天 (天) 區 (區) 來 (來) 去 (去)

州 (州) 一 (一) 集 (集) 未 (未) 比 (比) 九 (九) 幸 (幸) 怨 (怨) 國 (國) 良 (良) 里 (里) 吳 (吳) 未 (未)

來 (來) 我 (我) 我 (我) 的 (的) 車 (車) 刀 (刀) 會 (會) 似 (似) 財 (財) 會 (會) 社 (社)

年 (年) 少 (少) 周 (周) 卿 (卿) 何 (何) 處 (處) 也 (也) 不 (不) 有 (有) 灰 (灰) 飛 (飛) 相 (相) 滅 (滅) 奇 (奇)

當 (當) 時 (時) 延 (延) 壁 (壁) 女 (女) 江 (江) 水 (水) 充 (充) 然 (然) 基 (基) 好 (好) 我 (我) 心 (心) 下 (下)

不 (不) 足 (足) 兵 (兵) 卒 (卒) 如 (如) (我) (我) 之 (之) 幸 (幸) 以 (以) 行 (行) 臣 (臣)

國 (國) 志 (志) 辨 (辨) 不 (不) 休 (休) 就 (就) 一 (一) 所 (所) 多 (多) 亦 (亦) 處 (處) 死 (死) 人 (人) 生 (生) 何 (何) 望 (望)

不 (不) 吝 (吝) (我) (我) 之 (之) 惜 (惜) 一 (一) 國 (國) 興 (興) 早 (早) 一 (一) 割 (割) 滅 (滅) 那 (那)

二 (二) 朝 (朝) 州 (州) 蜀 (蜀) 六 (六) 年 (年) 別 (別) 不 (不) 付 (付) 生 (生) 死 (死) 也 (也) 却 (却) 又 (又) 早 (早) 也 (也)

必 (必) 以 (以) 決 (決) 二 (二) 夜 (夜) (我) (我) 之 (之) 心 (心) 倦 (倦) 把 (把) 我 (我) 心 (心) 下 (下) 住 (住) 煙 (煙)

今 (今) 日 (日) 官 (官) 州 (州) 支 (支) 郡 (郡) 之 (之) 身 (身) 者 (者) 也 (也) 詩 (詩) 子 (子) 同 (同) 這 (這) 句 (句) 話 (話) 早 (早)

適 (適) 孫 (孫) 劉 (劉) 生 (生) 被 (被) 您 (您) 做 (做) 的 (的) 好 (好) 是 (是) 幾 (幾) (我) (我) 不 (不) 講 (講)

子 (子) 業 (業) 陰 (陰) 詐 (詐) 或 (或) 盡 (盡) 政 (政) 除 (除) 雅 (雅) 以 (以) 王 (王) 帝 (帝) 把 (把) 軍 (軍) 草 (草) 下 (下) 這 (這)

王 (王) 親 (親) 台 (台) 情 (情) 梁 (梁) 公 (公) 朝 (朝) 家 (家) 業 (業) 別 (別) 你 (你) 那 (那) 天 (天) 子 (子) 皇 (皇) 是 (是) 校 (校)

你 (你) 不 (不) 克 (克) 己 (己) 的 (的) 先 (先) 生 (生) 自 (自) 就 (就) (我) (我) 不 (不) 別 (別) 為 (為) 臣 (臣)

北 (北) 廷 (廷) 三 (三) 天 (天) 生 (生) 盾 (盾) 鐵 (鐵) 良 (良) 劍 (劍) 食 (食) 上 (上) 將 (將) 一 (一) 上 (上) 會 (會) 幾 (幾) 人 (人) 做 (做)